



正月の 子供に成りて みたきなり

みなさま、本年もどうかよろしくお願い申し上げます。年明けはとても穏やかな三が日でスタートしました。酉年の今年は心穏やかながらも、気持ちは熱く、学びの質を大いに高め、飛躍の一年にしたいと張り切っています。さて、「お正月には、凧あげて、コマを回して♪」と唄われるように遊ぶ子供はみかけなくなりました。私の幼少のころは「お正月」の唄さながらの光景があちらこちらで広がっていたものですが、今はすっかり様変わりしています。元旦からショッピングモールは店を開き、家族連れで賑わい、一茶が詠んだように子供はお年玉で潤い、それを大人がうらやましがるのは、今も昔も変わらないといったところでしょうか。また一茶は、「めでたさも 中くらいなり おらが春」と詠んでいます。年を重ねてくると、お正月、お正月といつまでも浮かれているわけにはいかないとでもいいかげです。

ところで、気がつけば年明けからはやくも月末を迎え、「行く (1 月)」「逃げる (2 月)」「去る (3 月)」と言われるように、3 学期はあわただしく、瞬く間に過ぎていきます。1 年のまとめをしっかりとて、進級、進学、卒業に備えていきましょう。



インフルエンザに注意！

感染症に注意する季節がやってきました。特にインフルエンザはすでに流行期に突入し、今年はどうやら A 型が流行っているようです。診断されると発症から最低 5 日間、熱が下がらない場合は、解熱後 2 日間は学校をお休みするよう医師から指示がでます。安静にして、まめに水分補給を行うことが肝心です。たとえ学校を休んだとしても、手続き上は忌引き等の扱いとなり、出席しなければならぬ日数から引くことになりますから、欠席扱いにはなりません。安心して病状回復に努めましょう。ちなみに、学校指導医の西内 Dr の話では、感染予防で効果的なことはマスクをすることだということです。

ICT の充実にに向けた取組

ICT を教育に活用する取組について、従来から進めているところですが、昨年からテレビ会議システムを活用して、本校・分校の絆を深める実践に取り組んでいます。

まず、修学旅行事前学習を本校と国立高知病院分校とネット回線をつなぎ試みました。さらに、子鹿園分校、土佐希望の家分校との終業式・始業式（オンライン校長挨拶）にもトライしましたが、途中で回線が不安定になるなど、基礎的な環境にまだ課題があることがわかりました。一つ一つ改善しながら、交流学习、合同授業、遠隔授業などなど、活用の幅を広げ、本校と分校の絆を一層深める取組を推進していきたいと考えています。



特別支援学校に求められていること！

インクルーシブ教育システムという理念が世界的規模で提起された今、特別支援学校に求められていることについて再考してみます。

共生社会の実現に向けたこの教育理念の下、各国の対応は様々で、イタリアなどのように学校制度から特別支援学校をなくしてしまった国もあります。わが国を含めイギリス、フランス、アメリカなどは多様な教育的ニーズに対応する多様な学びの場（特別支援学校や特別支援学級）は今後も必要であるとしています。

そこで、特別支援学校に今後一層求められるのは、多様な教育的ニーズに対応できる高い専門性、そしてもう一つ大切なことがセンター的機能となります。センター的機能とはつまり、各都道府県に教員の指導力向上のための研修機関として「教育センター」がありますが、特別支援学校がこのセンター的な機能を持ち、地域の小中学校等の特別支援教育の充実に向け支援する役割を担うということです。

本校を例に挙げますと「地域連携部」が中心となり、小中学校等に在籍する障害のある児童生徒の指導・支援についてのアドバイスや教育相談、研修機会の提供のほか、就学前のお子さんについても就学前教室「わかば」の開設、保育所支援訪問などに取り組み、地域になくてはならない学校として、その存在意義が深まりつつあります。特別支援教育に関して「困ったときはわかくさ！」と地域の方に思っただけのよう、信頼される学校づくりにこれからも努めてまいります。